
テレビ通販殺人事件

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テレビ通販殺人事件

【Nコード】

N4863H

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

主婦の華絵が、今回はテレビ通販のキャスター殺人事件を体当たりで解決するシリーズ。

プロローグ

プロローグ

華絵は最近、仕事を辞めたので、時間を持て余していた。夫の給料でも食べてはいけるが、今後のことを考えれば働いていないと、年金などあてにはできない。

しかし、売り場の責任者は何かにつけ、華絵のことが鼻につくのか、みんなの前で注意しまくるのだ。もうパワハラで訴えようかとも思ったが、やさしい夫が

「もう十分働いたし、子供も独立したんだからいいじゃないか、ゆっくりしたら」

というので、それもありかなと思って、やめた途端に後悔した。

なぜかって、暇なのだ。

掃除、洗濯したって、夫婦二人の生活じゃそれほど汚したり、汗まみれになることもない。子供たちは県外で働き出し、母親にはメールの返事のみ。もちろん金を送る必要もなくなったが、親も必要ないとされた気分。そんな華絵に心の安らぎを与えてくれるのが、24時間販売のテレビ通販「セレブショッピング」。

今日も、夫が出社し、一通りの主婦の仕事とやらが終わると、テレビの前にすわった。

有川 聖子はこの通販番組のメインキャスターだ。

落ち着いた話しぶり、賢い控え目な態度、それでいて少しお茶目なところもあり、見ていて女性が憧れるタイプ。アクセサリーの値段は、仕事を辞めた主婦にとっては、ぎりぎり1万円まで。すべての通販合計がひと月3万円までにしないとやばい。

でも、見だすときがない。あれもこれも便利と思い、電話をしてみよう。オペレーターも、最近は男の声も多く、どれも、学生のバイトかなあと想像してしまう。若々しい声で、よろしいですかと

いわれると、よろしくなっちゃうのだ。

今日は、有川とビーズアクセサリーデザイナーの林 麗だ。

「林さん、このターコイズブルーは本当にきれいで、この夏のファッションには欠かせないアイテムになりそうですね」

「ええ、僕はよくハワイに行くんですが、その空と海は、こういう色なんです」

「あら、いいですね。では、みなさん数が減ってきています。お急ぎくださいね。今日は特別にお安くしていただきましたよ」

「はい、もうこれ以上は勘弁してください」

と二人の会話は続く。ターコイズブルーのネックレスをどこにしていくなどとは考えない。今は値段との駆け引きなのだ。私の弱い9980円。これは買うしかない。

「もしもし、注文したいんですが・・・」
いつものパターンが始まった。

第1章

第1章

朝から華絵はご機嫌だった。今日は「セレブショッピング」の公開放送に抽選で当たって行くのだ。

場所は東京セレブショッピング本社。高層ビル街の36階。

例のターコイズブルーのネックレスを付けて、麻のスーツに白いキャミソール。足元はブランドのヒール。何しろ、あの有川聖子に会えるのだ。しかも、大物女優の堀川樹里がデザインしたバッグを紹介するというのだ。ということは、聖子だけでなく、女優にも会えちゃうのだ。

エレベーターには22人。狭いがみんな行先は36階。これ以上はできないといえるほどおしゃべりしている女性ばかり。今日は50人が当選したという。本当にラッキー。

ライトが当たってスタンバイしていた聖子は、みんなに向かって「ようこそ、セレブショッピングへ。司会の有川せいこです。よろしく願います。」

やっぱりテレビで見ているとおり、感じがよくて、みんなファンのようなだった。年は43というのが、雑誌に出てたっけ。でも、もっともっと若く見える。

さらに、堀川樹里が入ってくると、もう、みんなうれしくて、握手してもらった。

「では、本番になりますから、どうぞ、しゃべらないように。」とディレクターやらアシスタントやらに注意され2時間はトイレにも行けないという。

「みなさん。今日は待ちに待ったスペシャルゲスト、堀川樹里さんデザインのバッグをご紹介します。担当は有川聖子です。そして、初めてこの番組に出ていただける堀川樹里さんです」

拍手を促す合図で、華絵たちはここで拍手。

さすがに、女優の風格を感じる堀川は、総レースの黒いワンピースがよく似合っていた。もう60近いと思うが、スタイルはよく華絵たちは見入っていた。テレビでもよく出てるが、好感度の高い女優だ。

バッグは牛革のショルダータイプと、ハンドルタイプが出てきた。色はレッド、トープ、ブラック、オフホワイト、ブルーの5色だった。どれもやわらかそうで、色も上品で使いやすそうだった。値段は四万円台で高めだが、海外ブランドを考えれば安い。

彼女が持てば、どのバッグも素敵だった。あちこちで

「私買う。売り切れないかしら」

と心配している。30分の間に心配どおりソールドアウトになってしまった。次に出てきたのはアクセサリーで、金のネックレスとブレスレット、そしてピアスだった。18金で各36000円という値段は、これまた、安くないのにソールドアウトとなってしまった。買えないので観客は、どこかでがっかりしていた。見たかったのも事実だが、やはり買ってこそ楽しい。

そこで、会場を移して、お茶タイムになった。

先ほどの商品が、飾られて、30個は残しているという。みんなうれしそうに注文していた。華絵もちろん一つ買った。ここで買わなければ恰好がつかないからだ。ターコイズと重ねてもいいように金のネックレスを。これは、聖子がよくお似合いですと、勧めてくれたからだ。

みんなの間をキャスターの聖子にこにこしながら回って挨拶をしていた。サインや記念撮影もして、もう一度、スタジオに見学することができるようになり、いそいそとスタジオに入ると、次はおいしい簡単手作りできる電子レンジ用容器の紹介で、会田信也が出ていた。愛想のよいキャスターで、主婦に人気がある。その横で、容器の紹介にきた社長が汗になって説明していた。もたもたしてい

るようなので、聖子がそれを試食することになり、割って入った。

「あれ、おいしそうですね」

と聖子ができあがった蒸しパンを食べた途端、ひきつったように倒れた。それを、テレビで流しているものだから、騒然となった。華絵たちはもちろんのこと、電話も鳴り響き、オペレーションセンターはパニックしてしまった。警察が来たのはいうまでもない。

聖子は死んでしまったのだ。

第2章

第2章

目の前で起きた殺人事件に、誰もが恐怖にひきつった顔をしていた。

セレブショッピングは、当然のことだが初めてのことで、キャスターはおびえながら進行せざるを得なかった。セレブ社は、急成長を遂げていた。今までカタログ通販や、ネット通販はあったが、この手の24時間実況中継というのは、このほかと数社あるだけだ。前年から比べると50パーセントは増えていた。この増え方はすごい。何しろ、この不況下でも、テレビを見る主婦は多く、真夜中でも買えるというのは、今までにはなかった。限られた外国の健康グッズぐらいで、そんな中、急に24時間も生放送の通販番組と言えば、当たらないはずがない。

「この場にいた皆さん、動かないでください。」

「えーっ、帰れないの。困ります」

あっちもこっちも主婦ばかりなのだから、夕飯前に帰りたいのだからここへきていることも半数は家族に秘密だろう。華絵も困ったと思っていたが、夫の修一は許してくれると信じていた。

みんな家族に連絡をしたがったが、ケータイは使用禁止だった。

華絵は今日のスタジオ見学のことを警察に何回も聞かれた。それは、誰ととか、キャスターの様子とか、気になることがなかったかとか。みんなここへ来たのは初めてだと思っていたら3回目の人や、2回目の人がかかりいた。

つまり、その人たちは、この番組に貢献している人たち、いわゆるお得意様なのだ。そういう人は、女優のバッグもアクセサリーもたくさん注文していたっけ。中でも、ケリーバッグを持っている望月涼子は、ひと際目立っていた。聖子の接し方も初めてとは思えな

い話し方で、この前はどうか言っていた。もう一人、串田咲。この人も、たくさん買っているようだったが、見るからに夜のお勤め風に見えた。どうも、銀座で名の通ったクラブ経営者ということだった。

華絵は目立ってもいないし、誰とも話をする事がなかったが、そばに寄ってきた人がいた。橋本 小枝子という保険外交員をしている人だった。会社には家で急用ができたと言ってきたのにとむくれていた。

大好きな有川聖子が殺されてしまって、みんなたまらない気持ちもあったが、自分にどんなことが降りかかるのか、言い知れぬ不安があった。

36階にあるのはこのセレブショッピングのスタジオとそれにかわる控室ぐらいで、オペレーションセンターは4階だった。感心しながら見て回ったが、社長室は37階にあった。そこには、一代で築いた湯川栄作社長と、義弟にあたる専務の大崎健二氏の重役、営業の部屋などがあった。秘書は5年間キャスターを務めた後抜擢された佐藤順子だった。きれいで口調も滑らかで、評判も良かったが、すぐに社長が自分のところへ引きぬいてしまった。まだ、20代だが英語、イタリア語が堪能で、秘書というより、影の取締役とも呼ばれていた。

今回の事件は会社にとって大打撃で、ライバル社のAGPにはうれしい誤算だった。というのも、あの事件で、昼の最も売れるバリエー価格の時間に起きたのだから、1時間止まってしまって、朝から残った商品と、お詫びのコメントとか、せざるを得ない状況で、AGPには、その分退屈している視聴者から、ライバル社へチャンネルが移ってしまって、その日は戻ることがなかった。さらに、その場で目をむき、死んでしまった有川聖子を映したのだから、抗議も殺到したのだ。

夜になって、やっと解放されたが、みんな文句タラタラで、お買い物券3000円くれても、足りないと怒っていた。

華絵はそこで、総務の佐々岡という男から声をかけられた。

「たしか、木村華絵さんでしたよね。」

「はい、そうですけど、何か・・・」

「実は、お便りの中に司会の仕事をしていたと書かれていたのですが・・・もう一度働くお気持ちはありませんか」

しまった、あれは、高校の頃の話。華絵は真っ赤になって断った。すると、佐々岡は、

「おわすれですか、斎藤さん、僕です、佐々岡剛です。高校2年の時にクラスが隣だったんですが、あの頃は木村さんでなく、斎藤華絵さんでしたよね。」

しばらく顔をみて、華絵は

「はあ、ああ、サッカー部のキャプテンでしたね。」

そうだそうだ、忘れていた。少し恰幅が良くなったからイメージが変わったけど、私もそうだよ。年取ったもの。

「じゃ、私の腕前も十分御存じでしょ、高校での放送部の話。」

「だから、お願いしているんです。みんなあなたの放送楽しみにしてたんですよ。」

意外だった。こんな25年もたってほめられるなんて。

今回の事件にかかわらず、もっとキャスターを増やしたいと考えていたが、年配層向けに、有川が人気があったように、40代のキャスターは見つけるのが大変だったという。いろいろ手垢のついたも見えていたという。ところが、この日、華絵を見つけた佐々岡はスタジオのディレクターにも見ていてほしいと頼んだら、やらせてみようという話になったのだそう。

殺人事件があったスタジオで、スカウトされるなんて、とも思っただが、一応家族と相談してくるようになった。

第3章

第3章

修一は、華絵の興奮した話を時には笑いながら、聞いていたが、キャスターに、ずぶの素人ができるのかということには、懐疑的だった。そんな人が振り向くような美人ではないし、もちろん話をすれば、話題も豊富で回転も速い。その点は向いていると思うがいくらニュースとは違って、何万という視聴者がいるのだから。

華絵はそんな修一の様子を見て、

「そうよね、そんながずないよねえ。」

「いや、でも、そうやって声をかけてくるのは、才能もあるってことだろうしなあ。」

「うん、やってみたい気もするのよね、ただ、心配なのは、今まで視聴者だった私が、画面の中に入るってこと。世界が変わるよね。」

「まあ、カメラテストみたいなのがあるだろうから、それを見て自分で決めたら」

「やってみたらみんなわかるよね、向いてるかどうか」

佐々岡には、修一と話したことをそのまま伝えた。

「いい旦那様ですね。それでいいと思います。とりあえず、明日スタジオに来ていただけますか」

華絵は朝から頑張って美容院に行き、服もすっきり見えるチャコールのスーツにした。

もし、これからキャスターに採用されたら、服も揃えてくれるのかなあ。などと、気持はすっかり舞い上がっていた。息子たちはその話を聞いて

「えーっ、ありえない」

と驚いていたが、失礼ねと言いながら、華絵もそうだねえと相槌を打っていた。息子たちは面白がって勧めてくれた。

スタジオには、商品の説明を書いたものと、商品とが置かれ、まず、テレビでおなじみの戸田悦子キャスターがお手本を見せてくれた。気軽な感じで、この人も人気のある人だ。商品をこう持つと、テレビにはこう映るとか、とにかくわかるように説明しないと、視聴者は触らないで、見ただけで買うのだからと言われた。

そんなこと考えたこともなかったが、そういう苦労もあるんだなあと、改めて思いあがった自分を反省した。何回かテストをすると、だんだん要領がわかり、自分でも落ち着いてできるようになってきた。すると、ゲストが来た場合の掛け合いもやってみた。華絵は持前の明るさと、主婦の経験から、視聴者が知りたいだろうと思うことを、言葉に出していた。それが、的を得ていると、佐々岡はオーケーと合図をしてくれた。

自分の写ったテレビをモニターで眺めると、照れてはだめということもよくわかり、1週間後に、夜中から出るようになった。

この時間帯は、多数の視聴者はいないが、目の肥えた人が多く、値段も結構高いものも売れるという。華絵はアクセサリーを担当することになっていた。白蝶貝を使ったものとか、ビーズのアクセサリーは色とりどりで、値段を覚えるのと、長さや色の説明をどうやったら視聴者に伝わるか一生懸命考えた。修一もそこが見えないとか、早口すぎるとか練習につきあってくれた。おかげで、値段まで覚えてしまう夫の温かい気持ちがうれしかった。

そのころ、キャスターのカメラテストをしたビデオを、湯川と大崎、佐藤、そして佐々岡が見ていた。

「こんな素人の主婦がいいのかい」

と、社長は言っていたが、嫌いではないという表情をみんな見抜いていた。確かにすらすらというわけにはいかないが、華絵はごく普通の感覚で、声もやさしく、なれば支持が増える予感があった。

「有川君があんなことになったし、そのあいだにAGPがずいぶんと売り上げたし、うちは大損だなあ。」

「社長、人気キャスターの死は、ある意味週刊誌が取り上げて、うちの社がテレビに出ることは増えましたよ」

「大崎君、それはそうだが、そんな宣伝はいらないよ」

二人のやりとりを聞いていた佐々岡が

「どうですか、この際、有川君の後、このキャスターの新人と面倒見のいい戸田悦子をダブルでしばらくやらせてみたいんですが」

「いいよ、仕方ないことだし。だが、戸田君はなんて言ってる？

新人と出ることには」

「はい、有川のあととはみんな自分がトップに、と思っていますから、今はやってくれると思います。」

「君はどう思う」

と社長は秘書の佐藤に話を振った。今日の佐藤順子はとてもきれいだった。白い肌が輝くようで、この人がテレビに出るのが一番なのだ、と、社長以外はみんな思っていた。

「私は、テレビに対するあこがれが、このキャスターでは得られないのではないだろうか。」

「まあ、有川のように、すぐにはなれないさ」

「私がテレビに復帰してはいけませんか」

と、佐藤は言い出した。社長はそばから離れるのは面白くないので、それには答えなかった。すると、

「社長、佐藤君の美貌と堅実な語りは、うちにとっては何のどころ手が出るほどです。そうしてもらえると、ずいぶんと売り上げも伸びる気がします。」

と、大崎は社長に懇願するように言った。佐々岡は、その言い方が、なんだか佐藤に媚びているようで解せなかった。社長もこの際この美貌のキャスターを支えているのは、この俺だと自慢できるような気もしてきた。3年のブランクがあるからと、この主婦の華絵と、一緒に練習期間がほしいと佐藤順子は華やいだ気持ちを隠せずに言った。

第4章

第4章

順子と湯川は、いつもの大手ホテルの部屋にいた。

「大丈夫かい、あんなこと言って。今のテレビは大変だよ。」

「ええ、でも、やりたいの。秘書の仕事は世良さんがやってくれて
いるし、私もまだ、自分の可能性を試してみたいし」

「まあ、やってみたらいい。でも、反応が悪かったら、みんなと同じ
キャストだからね、仕事は」

「ええ、見てて。私がんばるわ。少なくとも、あの素人主婦には負
けない自信があるの。」

二人はまた、けだるい朝の光の中で、それぞれの思惑を相手に知
られないように膨らませていた。

佐々岡は華絵に電話をしてこれからのレッスンと予定について話
した。

華絵は電話の声も魅力的で、とりあえずプッシュボタンのサービ
スの声を吹き込むことになった。品物を確保するために、オペレー
ターを通さずに申し込む方法だ。

「ご希望の商品番号を押してください」とか「数量を押してくださ
い」とかのアナウンスだ。

ドキドキしながらも、華絵は1回でできた。

佐々岡は

「さすがだね、もう昔の感覚がもどったみたいだね。」

と華絵ににこにこしながら、話しかけた。華絵もほめてもらえて、
どこかでほっとしていた。そんな二人のところへ、佐藤順子がやっ
てきた。これは、もうびっくりするぐらいきれいだった。華絵は佐
藤順子とはきづかなかった。なにしろ、ここ数年番組からは遠ざか
っていたのだから。佐々岡は、佐藤に華絵を紹介した。すると、

「よろしくね、私も久しぶりの復帰なので、一緒に練習させていた
だくわ。木村さん」

「こちらこそ、よろしくお願いします。素人なので、お聞き苦しい
こともあると思いますが。光栄です」

二人はにこやかにあいさつしあった。華絵は順子のアナウンスを
聞いてがっくりと自信を失った。本当に聞きやすく、華やかで、目
でもしっかり訴えていた。これでは、視聴者は買わずにいられない。
それに比べて、私は高校生みたいで、買うほうも本当にいい製品だ
ろうかと不安に思うんじゃないかと、考えてしまった。

あまりにしょげた華絵を見て、佐々岡は

「それぞれの個性でやればいいんだから。それに休んでいたとはい
え、あっちはプロだから」
と、華絵を慰めた。

「そうですね、プロですね。力の差をいやでも知らされました」
華絵は本気でそう思っていた。有川と佐藤は二人ともとてもすばら
しかった。でも、有川が人気が上がるにつれ、佐藤はいつの間にか
社長秘書になっていた。

そのことが、どれほど、二人のキャスターを傷つけていたか。

有川は湯川と設立の時から仲だった。セレブショッピングが、
こんなにはやる前から。年上の有川が、何かと商品の開発を助けて
いた。しかし、売れ行きが急上昇するにつれ、きれいなキャスター
が次々と入社した。しかし、みんな有川と社長がそんな深い中とは
知らなかった。賢い有川は人前では決してべたべたせず、しっか
りと社長を支えていた。だから、みんなが打ち上げなどで盛り上が
って
「社長のいい人は有川さんじゃないんですか」
と聞いても、二人とも

「そんなこと言ったら、あいてに迷惑」

と言って、軽く否定していた。佐藤はひとり見抜いていた。有川と
社長の仲を。だが、キャスターとしての人気も、愛情までも自分よ

り上というのが許せなかった。佐藤は湯川の企画力や、社長としての統率力も、そして、青年実業家としての彼も好きだった。

順子と社長がいい仲らしいと聞くと、有川はあきらめたように、身を引いた。年上だし、あの彼が今は隠さず夢中というのがだれの目にも明らかだったから。自分の時は否定ばかりだったのに。悲しかった。でも、みつともない真似はしたくなかった。プライドがゆるさなかった。

キャスターの地位は守ろうと有川はますます仕事に磨きをかけた。社長は順子の性格の激しさを知っていたから、自分の片腕としてという言い方で、順子を秘書にしたのだった。

こんな夜遅い仕事は、はたして妻のためになるのだろうか、と修一は心配に思ったが、あれほど生き生きとしている妻を見ると、それもいいかとも思った。夜中のセレブショッピングは、今日は華絵が下着を売っていた。下着といっても、最近のはお洒落でカラフルだった。総レースで、安いという触れ込みだが、華絵がこれを昨日身につけてたのを覚えていた。

「いやにゴージャスだな」

「そうでしょ、これ、総レースなのよ。クロッチ部分が綿でいいの。足の付け根も痛くないし・・・」

「そんなことどうでもいいよ」

といいながら、脱がしたのは僕だった。変な気分だが、この放送のためかと、苦笑いした。キャスターの夫たちはみんなこうなのか、まあいいか。

朝から戸田悦子がしきりと謝っていた。商品の色を間違って伝えたというのだ。ベージュとレッドの縞模様の綿のストールとカーキとピンクの縞模様が微妙に似ていて、しかも買いやすい値段だったために、途中で気づいたバイヤーが、

「違う違う、こっちがベージュのストールよ」

と戸田にイヤホンで教えたが、すでに申込みが200件を超えていたのだ。みるみる顔色が変わったが、それはみんな同じだった。

「いったい、どっちがベージュなの」

「私を買いたかったのはカーキなのに、売り切れたって。じゃ、注文は無効なの」

と、抗議が殺到したのだ。オペレーターも悲鳴をあげるし、大騒ぎになった。社長も耳にするとところとなり、香港の会議がらあわてて帰国することになった。

やっと、華絵が独り立ちしたので、気が抜けたのか、戸田はかわいそうなぐらい小さくなっていた。しかし、だからと言ってこの騒ぎの責任は重い。商品を買いつけたところに無理を言って、増産をしてもらい、客にはこの商品でなかったという人には、改めてお詫びのコメントを入れなければならない。そのためにはお詫びの気持ちのサービス券も入れなくては。だんだん現場の雰囲気は戸田にはとてつもなく重いものになっていった。

「もうしわけありません。このたびの商品情報を間違ってお伝えしてしまいました。」

深々と頭をさげる戸田は泣き声になっていた。しかし、テレビで購入した人が相手なのだから、泣いても許されない。華絵はまるで自分のせいのような気がしていた。

私がしっかりしていたら、彼女も仕事のペースを変えなくてもよかったのにと。

第5章

第5章

堀川樹里はセレブショッピングの大崎健二と話していた。

先日の事件で、堀川はあの時スタジオにいた関係で、警察に調べられた。

「本当にいい迷惑だわ。せっかく初めてのデザインしたものを紹介して売ってくれるというから、張り切って行けばこんなことになって。」

「申し訳ありません。当社といたしましても、大損です。有川は優秀なキャスターでしたし、堀川さんのデザインは人気が高く、すぐに第2回目のショーを展開します。」

「まあ、犯人も捕まっていないので、私も怖いよね。」

「警察も何やっているんでしょう。あれから、みんな取り調べを受けたのに、ここ数日は連絡がないんですよ。」

佐々岡がそこへやってきた。

「ああ、堀川さん。本当にご迷惑をおかけしました。でも、あの時の商品はすべてソールドアウトで、視聴者から、第2弾はいつかとすごい問い合わせが来てます。来週、計画どおりに2回目をしたいと思うんですが、いかががでしょうか」

二人を見ながら、堀川樹里は言いにくそうに語り始めた。

「実は、AGPから、お誘いをいただいているの。黙ってやるとせっかく企画してくれたお宅に悪いから、この際言うんだけど。」

大崎と佐々岡はあわてた。

「そんな、うちとだけという話で進めてきたことですよ。それをいまさう」

「そうですよ、考え直してください。契約もしていますから。」
堀川は契約という言葉に反応した。

「それは、どうでしょう、あの契約の中に、今回の事件に巻き込まれることが書かれていないでしょう。私のダメージもあるのよ。だって、犯人も内輪にいるかもしれないのに、そんな場所でもう一度は怖いわよ。」

「それは、こちらも十分監視をしますし、それまでに、逮捕されると思いますし。」

と、佐々岡は言っではみたものの、自信はなかった。大崎は、この事件によって、だんだん会社のイメージが悪くなっていったるのを感じざるを得なかった。

「とりあえず、お約束しているから、2回目はお宅の雑誌にも予告しているから出るわ。でも、それ以降は考えさせていただくわ。」

「わかりました。全力で取り組んで、ご納得のいくようにショーも展開させていただきます。」

この場はとにかく怒らせてはまずいと、二人とも考えた。

堀川が部屋を出ると、早速二人は社長との話し合いに向かった。

社長は妻の麗が警察がうちに来たというので、夫に報告をしに来たところだった。麗はいつもの秘書がいないので、ニコニコしていた。「あなた、警察が言うには、犯人が捕まっていないから、会社への恨みなら、うちもその中に入るかもしれないって。」

「えっ、そうなのか、それはそうだ。いったい誰なんだ。」

ノックして入ってきたのは佐々岡たちだった。堀川とのいきさつを話したためだった。麗はその雰囲気を感じ取って帰ろうとした。

「ねえ、いつもの秘書はどこなの」

と聞いた。大崎は

「実は、今回の事件もあって、佐藤君はキャスターにもどってもらうことになったんです。」

それを聞くと、麗は明るい声で、

「そうなの、そう。それはいい考えね。あの美貌ですもの、社長が独り占めはだめよね。」

と、少し睨みながら湯川を見ているが、社長は知らん顔だった。それでも、麗は機嫌よく帰って行った。

華絵は今日は休みだったが、朝から憂鬱だった。刑事が来ていたのだ。刑事は恩田俊夫という50代のやさしそうな男だった。もう一人は佐伯実という20代の若々しい感じの青年だった。しかし、この前から何回も同じことを聞かれているのもういやだった。けれども、警察もテレビにも出てしまった事件が、つかまらないでは抗議も殺到しているという。

「奥さん、この頃、テレビに出てますね。どうですか、キャスターという仕事は。なかなか商品の説明もわかりやすく、うちの女房も上手だって言ってましたよ。」

「あら、そうなの、奥様もテレビ通販ご覧になるの。」

こういうところがうまいんだよなあと、佐伯は苦笑いしていた。

「ええ、難しいのよ、でも、高校の同級生が声をかけてくださったの。」

「そうですか、昔から光っていたんですね」

と、ますます、喜ぶようなことを恩田は言った。そして

「その同級生って、なんておっしゃるんですか」

少し、恩田の目がきらりとした。華絵はそれには気づかず、

「佐々岡剛さんです。営業の」

「ああ、あの方はなかなか腕の立つような方ですね。そうですか、あの方とは高校が同じなんですか」

「ええ、あの人はサッカー部のキャプテンだったんですよ。当時、みんなの人気の的でした」

うなづきながら、笑顔で聞いてくれると、ついつい話したくなるものだ。恩田は気長に聞いていた。

「ところで、佐々岡さんは有川さんのことなんか話していましたか」

「いいえ、大変な方をなくしたから大変だって」

「そのあとに入るんですから、すごいですね」

「違うの、私なんかではないの。あとは佐藤順子さん。社長の秘書だった人よ。前にもキャスターをしていたけど、社長に見いだされて、秘書になっていたんですって。今度のことで、復帰されるのよ」

「あの、秘書の方が、キャスターですか」

恩田はいろいろとお聞きしてすみませんとあいさつして帰って行った。佐伯は早速、佐藤や佐々岡について調べることを考えていた。恩田はもう一人追加した。それは、今日会った湯川麗だった。

第6章

第6章

湯川麗はいつものエステサロンにいた。

会員制のエステで新製品という、ボディ乳液をたっぷり塗ってマッサージしてもらっていた。ふくらはぎや足の裏までもんでもらうと天国に行くかのような気持ちになる。

麗はセレブショッピングの一番の株主である大崎巖の娘で、幼稚園から大学までストリートのお嬢様学校に行っていた。父は娘を溺愛していたので、湯川が有川聖子と付き合っているにもかかわらず、湯川の経営の手腕は認めていたので、麗が結婚したいといってもやめろとは言わなかった。おかげで、ずいぶんと儲けさせてもらったものだ。

しかし、息子までが、セレブショッピングに勤務するとは思っていなかった。健二は家内の連れ子で、自分にはなついていなかった。麗は先妻、ゆかりとの間に生まれた子供だった。ゆかりは清水興業の一人娘だった。いわば巖のほうで財閥に取り入ったの結婚だった。だが、ゆかりはやさしく、おっとりしていて本当にいい妻だった。

しかし、結婚して10年で、病魔に侵されて死んでいった。そのあと、義父の世話で奈津美と結婚した。奈津美は静かで落ち着いた女だったが、シングルで息子を生み、育てていた。父の名は明かさなかったが、湯川は義父が、そうだったのではないかとずっと思っていた。そのため、よけいに健二とは遠ざかって行ったように思う。

麗は母には似ず、性格的にはとても激しかった。若いころはそれでもよかったが、社長の妻としての立場を考えると、もう少し後ろにいたほうがカッコいいのだが、湯川の周りが気になって仕方がなかった。佐藤順子は本当にいやな感じだが、まだ許せる。女として、それほど変わりはない。

だが、有川は違っていた。湯川は別れても、絶対に有川聖子のこ

とを悪く言わないし、湯川だけでなく、弟の健二までも。それが、許せなかった。麗が会社で偶然会った時も、有川はにこやかでみんなともいつも楽しそうににこにこしていた。その雰囲気、麗にはなかった。佐藤順子にもなかった。この華やかでそれでいて上品な雰囲気はこのテレビ通販には欠かせないものだった。麗は妬ましかった。湯川とも別れていたのに、健二までもがこの女に魅かれていたのだ。

健二はケータイに残った有川聖子の声を聞いていた。

「ごめんなさい、これ以上お会いすることはできません。私はあなたよりずっと年上です。あなたは私を美化しすぎています。」

これは、亡くなった日の朝、出社前に吹き込まれていた。

健二は湯川との交際も知っていたが、そんなことどうでもよかった。今は完全に一人だし、みんな付き合った経験はあるものだ。しかも、仕事でも、外でもいつも魅力的だった。人には分け隔てなくやさしいし、スタジオのアシスタントにも気配りができていた。だから、今回の事件はみんな信じられなかった。こんなことをする人間がいることが。

テレビの世界はそれでも続く。彼女がいなくなっても、自分もそうだ。忘れたかのように。今日、この手紙を見つけるまでは。その手紙は、自分の机の引出しに入っていた。

健二さん、

私は今、オフィスの中で考えています。

この世界はいつまでも輝くばかりではいられない。私は最近テレビの中に映る自分の姿をモニターで見ると、愕然とします。

だって、やはり年齢は隠せません。あなたと逢っているときは楽しくて、時がたつのを忘れるほどです。でも、ふっと、考えるとあなたが男ざかりの頃、私は定年を迎え、子供ができて、年老いた母と若い父。

悲しくなります。

これから私たちは共白髪ではなく、私だけが年老いていくようにで嫉妬に苦しむのも目に見えています。この華やかな女性が多い職場で、好きになった人が、他の女性に心を奪われていくのを見るのはもうたくさんです。私は嫉妬深く、悲しいほどに見栄っ張りなの。傷ついてなんかいないわというふりをすることも、きつともうできないと思います。

健二さんが、今はわたしのことを愛してくれているのはとっても嬉しいの。でも、怖い。信じていても、人の心は移ろいやすいもの。どうして信じてくれないと、あなたは言うけど。私は怖くてたまらないの。ずっと、そばにいてほしいのに。

聖子

これを読んだとき、聖子の嫉妬に狂う顔なんて・・・どうしても考えられなかったが、そこまで思いつめていたのがいとおしかった。そして、彼女をこんなにも悲しませた湯川を許せないと思った。だが、それにしても、そんな彼女をいったい誰が殺すというのだ。

華絵が控室で商品の説明を練習していた。廊下でケータイを耳にしている大崎を見た。泣いているように見えた。まさか、でも、大の男がなんで泣くのか。

佐藤順子は早速キャスターとしての人気を集めていた。視聴者はやたらと彼女と話したがった。いつもは、電話に出てほしいとオペレーターが頼んでもなかなか快くは引き受けてくれないのに、佐藤は別格だった。売り上げもいいし、視聴者が話したいということが多くなった。その話を聞いて順子はますます気を引き締めてやろうと考えた。

華絵に対してもほかのキャスターは、友達感覚になって行っただ、順子は自分から挨拶はしなかった。社長もそんな佐藤を見て見ぬふ

りだった。華絵はあの大崎が気になった。大崎は辣腕の佐々岡に隠れ気味だが、芯のあるような男に見える。つまり修一のような。夫は目立たない人だが、会社の中でもきつと欠かせない人物だと思う。この頃、夫の包容力をひしひしと感じているから尚更か。

そういえばあの事件が起きたとき、一番にスタジオに戻ってきたのは彼だった。その時はあまり思わなかったが、悲しみ方が普通ではなかったような、……。社長も来たが、顔色は真っ青だったが、大崎のような悲しみ方とは違ったような……。

会田信也はあれ以来テレビから消えていた。というのも、彼の商品説明の時間だった。いつもは流暢に進むのだが、この日の容器の社長の説明が、上がってしまって、うまくいかず、彼までがもたもたして、しまいにはあの事件になったのだ。聖子はいつも助けてくれた。あの日はスタジオ見学さえ終わればすべての仕事が終わるはずだった。そんなとき、どうして死んでしまったのか。

おかげで随分と調べられて、会田は出社することも謹慎となっていた。あれは計画的なことではないし、あの日、聖子が手伝ってくれる予定にもなっていなかったのだ。それが、どうして、おれが殺人ということになるのだ。断じてやっていないという言葉信じてくれたのは恩田という刑事だけだった。

華絵は大崎が、麗と姉弟と聞いて驚いた。あまりにも雰囲気が違う。どうやら血はつながっていないらしい。だが、麗の視線は大崎を追っているのを見てしまった。湯川に対しても、すぐく嫉妬するというが、目は大崎を確かに追っている気がする。ああ、あの日も、いたっけ。スタジオ見学の時にいつも来ているというのを、戸田から聞いていた。前は人が集まらない時のさくらだったらしいが、今は必ず席を取っておくのが暗黙のルールという。

あの日の観客の一人、橋本小枝子は保険外交員で、その時に「あの、隅にいるおきれいな方が、社長の奥さまよ。」

って、教えてくれたのだ。彼女の得意先と言ってたっけ。堀川樹里やキャスターに夢中で、気も止めなかったが。今思えば、あの大崎が悲しんでいた時に、麗は目を見開いていた。それは、目の前で起きた事件にみんな恐怖で見えていたが、彼女は聖子より大崎を見ていた。華絵は持前の好奇心がぐつと頭をもたげてきた。

第7章

第7章

華絵は修一と久しぶりに待ち合わせをしていた。

今日は結婚記念日。息子たちは何も要らないという私の言葉を簡単に信じて、メールしか来ない。

修一は、やさしかった。毎年、花束を忘れない。そして、豪華な夕食を食べに行く。さらに、プレゼントも。私は幸せ者だと思う。今日は銀座で乾杯。これがまた、素敵なお店と評判で、ここに行きたいと前からおねだりをしていた。

修一はやっぱり、花束を持ってあらわれた。こういうところが好きなどころ。華絵はうれしかった。

腕を組みながら、歩いていると、目の前に大きな外車。あの番号は、やはり湯川麗。

麗は私たちと同じ店に入った。あの豪華な店に当然だが、手慣れた雰囲気で、しかも、奥の一番にいい席へ。修一と私など、全く気付く様子もなかった。華絵も今夜は私は主役と思っていたので、彼女を気にも留めないはずだった。ところが、例の大崎が来たのだ。彼女の待っているほうへ、そのまま、これまた、華絵には気づかず姉と弟なのだから、別におかしいことではない。しかし、気になる。

修一は小さな包みを出した。

「これ、おめでとう」

「えっ、なあに」

華絵に渡した包みは、ダイヤのペンダントだった。

「わあ、すごい。ありがとう。」

「うん、今回は奮発したよ。でも、テレビで見るとこれが光ってい

るといいかなと思って。」

「うんうん、本当にありがとう、・・・」

思わず泣いてしまった。テレビも見えてくれたんだ。華絵は大崎と麗のことなんかすっかり忘れてしまった。

恩田は佐々岡剛と会った時のことを思い出していた。そつなく、嫌味もなく受け答えは誠実そうだった。しかし、ひとつ気になるのは、どうして木村華絵に声をかけたのかということだった。自分たちが見ると、そんなスカウトするような女性には見えなかった。飛びぬけてきれいとはいえないし・・・。ただ、話をするとき楽しい感じがした。佐々岡は、

「手がかりはないんですか。」

「ええ、少しずつですが、進んできたかもしれません」

「ああ、よかった。犯人はだれか分かってきたんですか」

「まあ、捜査上の秘密でして」

佐伯は思わず「だれですか、それは」と聞きたくなる気を押さえていた。恩田は佐々岡とあの日の容器を用意したのはアシスタントであると聞いたが、持ってきた社長はどんな人物か聞いてみたかった。本人は確かに事情聴取をしたが、あの日はみんな興奮状態だった。

そこで、佐々岡からも聞いておきたかった。

「あのエナメル社の社長は、今回初めての企画で、社長夫人の麗さん推薦なんです。」

「へえ、社長夫人も企画するんですか。」

「ときどきは。やはり主婦の目ということだ。」

恩田は麗の企画というのに、少し気になった。

麗は、独特の雰囲気があり、微妙に男心を惑わせる感じがした。刑事がそんな気になっても仕方がないが。でも、麗は危なそうだ。身近にいます。どの家庭にもさざ波が起きそうだ。

「麗さんは、おきれいな方ですが、社長のほかに、好きになる方

は多かったんでしょね。」

と、恩田は佐々岡に話を向けた。佐々岡は

「いやあ、聞かないですね。ただ、弟をとっても大事にしている、気にかけていますよ。あんなお姉さんがいたらいいなあとみんな言ってますから。」

「それは、大崎さんですか。」

「ええ、大崎さんも、真面目ですし、あまり、女性の噂などありません。だから、よけいに姉として監視しているのかもと言ってますよ。」

「結構、もてそうな人ですよ、大崎さん。あの有川さんとはどうでしたか。」

「いやあ、社内では有川聖子とは、みんな仲良くしてましたし、彼女は賢いですから、会社でべたべたしませんから。大崎さんと仲がいいとは聞いてなかったですよ。まあ、あり得ないでしょ」

「どうしてですか」

恩田は思わず膝を乗り出した。

「だって、麗さんは健二さんのことをとても大事にしているし、それを知らない人はいないし。聖子さんは前に社長と付き合っていたこともあるから。そんな人との交際なんてありえないでしょ」

「なるほど、でも、あの日の様子がみんな心に残っているみたいでしたよ。大崎さんの」

そうか、とつぶやきながらも佐々岡は信じられない様子だった。

恩田はもう一度エナメル社の社長に会ってみた。

大野幸一はテレビで一旗揚げようと思っていたが、あの事件でケチがついたと感じていた。麗さんはもう一回企画してあげると言ってくれたが、大丈夫だろうか。麗とはあの事件の半年前に、出会ったのだ。

麗は大野の妻と同じエステサロンなのだ。大野佳代は麗と親しくなりたかった。夫からそう言われていたから。会社の売り上げもこ

こ数年似たような会社が増えて、どうしても、大手が残る。うちの
ような新参者は通販でもやらないと無理。

やっと、それができたのに、今回の事件。えらい迷惑だ。しかも、
警察にも何回も足を運んだ。

「またですか、刑事さん」

「いやあ、どうも、もう少し聞きたくて」

恩田は低姿勢で大野に向かっていた。大野はいい気分はしなかつ
たが、変に怒っても怪しまれそうで仕方なしに付き合っていた。

「あの日に、麗さんとは会いましたか」

「社長夫人のことですか」

「はい、この会社の口利きをしてくれたのも麗さんですから、気に
なっただけでしょう。」

「ほう、どこで話しましたか」

「いえ、話す暇はなくて、にこつとあいさつしただけです」

「では、近くには来なかったんですか。実演の場所へは。」

「そうです」

首をかしげながら、恩田はさらに聞いた。

「大野さんはその場を離れることはありませんでしたか」

今まで、ないと言っているのにと思いながら、もう一度思い出し
ていた。

「あつ、そういえば・・・」

大野は何か思い出したようだった。

第8章

第8章

麗は機嫌がよかった。この日は健二と久しぶりに二人で食事だった。銀座の店に弟と来るのは2年ぶりだった。麗と会う時も、いつもは会社の近くの喫茶店くらいで、健二はあまり積極的に会うことはしなかった。

麗は健二のことを弟というより、身近な異性として見ていた。後妻の連れ子としてきたときから。可愛かったし、従順だった。幼いときは。しかし、中学、高校と進むにつれて、クラブで活躍し、女子が騒いでいるのを見ると、心地よかったが、健二は無口になり、避けるようになっていった。

麗は気になっていた。自分が健二の目から見ると、どう映るのかと。高校の頃には、意識して部屋を開け放して着替えもした。風呂上りのバスタオルまいただけでの姿で、わざと居間を歩いたり、お祭りのときは、健二が行くところへ、必ず浴衣姿で行った。だが、健二は姉のことを周りがどんなにいいなあと呼んでも、ひとつもその話には乗らなかった。母の奈津美に対する態度が許せなかったのだ。いくら後妻とはいえ、ぞんざいに扱うようで、しかも、父もそんな姉の態度をろくに注意しなかった。父は健二も愛そうとはしなかった。ひたすら父の目には麗しか映っていないようだった。

奈津美は小さくなって暮らしていたし、決してそのことを誰にも訴えようとはしなかった。そんな卑屈な態度が健二はたまらなかった。美しい姉を好きだという思いと、冷たくする姉を許さないという気持ちとが交錯して避けるしかなかった。そんな姉が食事をしようと言ってきた。さすがに、今回は落ち込んでいたので、姉と会う気になった。

「健二さん、ずいぶん痩せたわね。大丈夫なの」

「ああ、いろいろ会社にあったから忙しくて」

「そうねえ、聖子さんお気の毒にね。まだ、解決しないし、いまどきの警察って、のんびり仕事をしてるのかしら」

「いやあ、だけど、こんなに時間がかかるとはおもわなかったよ。」
今日は私にまかせてねと言うので、料理もワインも麗が決めていた。こんな時の麗はきれいだとつくづく思う。ふっと、麗が健二の視線を感じて、うれしそうに笑った。

麗は久しぶりに独り占めできる健二との時間を大切にしたかった。銀座で夫と食事をしても、なんとも思わないが、健二とは楽しかった。あまり話をしないが健二は聞くことが上手で、何でも打ち明けられた。ワインを飲んでも、酔いがどんどん回るようだった。

「姉さん、大丈夫かい、ピッチが速いよ。足にくるよ、酔いが」

「いいの、健二さんとはあまり会えないもん」

「そんなことないじゃないか、いつも会社に来るくせに」

「あれは、あなたが外で会ってくれないからよ」

「姉としょっちゅう会う弟なんて、聞いたことないよ」

「いいじゃない、健ちゃんはかわいい弟、ひとりきりの弟なんだから」

「はいはい、その通りです」

麗は高揚していた。こんなやりとりは何年振りだろう。

「健ちゃん、聖子さんのこと本気だったの」

と、思わず聞いてしまった。健二はびっくりした顔で、

「何で、知ってるの。会社では誰も知らないと思ってたよ」

酔った麗は、しまったとも思ったが、ついつい話してしまった。

「聖子さんがデパートで買い物してるの見ちゃったの。男物。だから、誰に贈るのって聞いたたら、なかなか言わないもの。でも、あなたがそのネクタイしてるのを見たから、ピンと来たわ。」

健二は、聖子が誕生日にくれたネクタイを今日もしていた。一度に酔いがさめた。

「ああ、そうだよ。いまさら隠してもしょうがないけど。これで、何もかもなくなったよ、僕には」

「どういうこと、それ。何もないって、私がいるじゃない」

「姉さんは姉さんだろ、それ以上どうなるわけでもなし、恋人にはなれないだろ」

「ひどい、そんな言い方。仕方ないじゃない、そんなこと」

健二は麗にそう言われて、驚いていた。麗がそういう風に自分を見ていたこと、初めて知ったのだ。

麗はそのあと、そのことは二人とも触れることはなかった。だが、帰りの車の中で、

「健ちゃん、また、会ってね。私を避けないで」

「避けるなんて・・・」

「お願い、こうして会っている時だけが、私は幸せなの」

と言いながら、健二の肩にもたれながら寝てしまった。しかし、麗の手は、健二の手の上に置かれていた。健二は姉も幸せではないと感じた。

華絵はあの日、麗と大崎を見てから、麗のことを思い出していた。

そういえば、聖子には冷ややかなど感じたことがあった。聖子が楽しそうにデパートでの買い物話をしていると、

「そうね、聖子さんは、そういう売り場で目立つ買い物をしたいのよね。キャスターが男物を探せば目立つわよ」

言われた聖子は耳まで赤くして部屋から出て行った。その時は華絵と戸田と三人だったが、あとは気まずい雰囲気になってしまった。華絵が言う前に、戸田が

「何で、あんな言い方をするのかしら。聖子さんだって大人の女性よ、男物ぐらい買うわよ。どこで買おうと勝手じゃない」

「麗さんと聖子さんは仲が悪いんですか」

「違うわ、いつも一方的に嫌味を言うのは麗さんよ。最近になつてなのよ、それが」

華絵が聖子と大崎を見たのは、大雨の日、みんなタクシーが拾えず、相乗りでかえることになった。その時、確かに大崎が聖子と残

ったのだ。聖子が前に降りるはずだったのに、大崎がひきとめたのを思い出した。仕事をしてしまおうと言ったが、なんだか不思議に思ったのも事実だった。まだ、スタジオ入りして3日目だったから忘れていたが。

今となつては二人が男と女の関係だというのがわかる。

あの私の誕生日。銀座の店を出るときは、麗は酔っていた。大崎に体を預けながら、

「幸せだわ、今日は健ちゃんと一緒」

って、言ってたっけ。大崎は困ったように店の主人に謝りながら、出て行った。二人とも気がつかなかったようだが、夫は

「ずいぶんと酔ってるねえ。弟さんも大変だね」

「でも、あんなに酔うなんて、麗さんてお酒強いのに」

「よっぽど、うれしかったんだねえ」

華絵は二人の後ろ姿を見送りながら、麗が健二を愛しているのはと思っていた。姉と弟と言っても、義理の弟だと言ってた。麗が酔っても、それはわかるような気がしていた。弟では結婚できない、愛し合うことはできないのだ。

昔から麗が弟を愛していたとすると、これはたまらないことだろう。すると、今度の事件も、ひょっとすると、・・・

「まさか・・・でも・・・」

華絵は持前の好奇心と、麗の女としての哀しみをもっと知りたいと思い始めていた。

第9章

第9章

修一は今日も朝から妻のテレビを見ていた。今日は朝は少し遅れると、会社で電話したところだ。

今日の華絵は、あの例の電子レンジ用容器の宣伝だ。聖子が死んだあと初めての番組が妻が担当というと、気分が重い。華やかにテレビは進むが、妻が試食するたびにドキドキする。華絵は度胸が据わっているのか、平然と食べている。早く犯人が捕まってくれないと、おちおち仕事にも行けない。無事にこの時間が過ぎて、おもむろに出勤した。

華絵は、社長の大野と話していた。社長はソールドアウトになってご機嫌だった。あの時は急にとまったので全く売れなかった。今日は3800円のセットが10000セット売れた。簡単に3800万円が売れたことになる。こんなこと、テレビでなければありえないのだ。

「社長さん、よかったですねえ。」

と華絵は自分もほっとしていた。この頃はひとりで番組を進めているが、主婦らしい雰囲気嫌味でないと結構評判がいいらしい。昨日佐々岡にそうほめてもらったばかりだ。社長は、

「おかげでたくさん売れました。よかったです。これも麗さんのおかげです。」

「あの時、うちの企業を取り上げてくれなかったら、いつまでも世間に覚えてもらえなかったことでしょう。」

今日もこれから、湯川社長の自宅にお礼を言いに行くそうだ。華絵は、有川聖子と麗の様子をさりげなく聞いてみた。

「あの日のキャスターは、会田さんでしたね。はりきってたのに大変なことになってしまってます。」

「ええ、有川さんもやさしい方で、私がもたもたしているから気を利かして来てくださったらあんなことになって。」

「社長はケータイの着信音はエリーゼのためなんです。先ほど鳴ってましたから。」

「ええ、娘が昔ピアノを習っていて、この曲を練習してましたから、それで娘からの電話がエリーゼなんです。」

「あらそう、じゃ、あの時もお嬢さんがかけてきたんですか」

「よけいにあわててしまいましたよ、リハーサルするときだからよかったけど、思わずその場を離れて怒りに行きましたよ。」

「えっ、リハーサルですか。その場を離れたんですね。」

「そうです、あ、わ、私はこれで失礼・・・」

あわてて社長は出て行ってしまった。

その場を離れた時間があつたのだ、わずかだが。その時に麗さんはどこにいたのかしら。大崎さんは。佐藤さんはどこにいたのかしら。佐々岡さんはどうしていたっけ。

会田さんはあの時みんなの前にならずといたし、アシスタントはカメラ前にずっといたし、そうそう麗さんはあの社長の奥さまと一緒に話をしていた、それから、奥様が外に出て行ったんだったわ。確か、ケータイをバッグから出していたわ。あのバッグがとても高いケリーバッグだから覚えているわ。いやあ、スタジオから出てはいけないといわれてたのは私たち見学者だけだったのかしら。

でも、さっきの社長の話だと、お嬢さんと言ったけど、あの日お嬢さんもこのスタジオにいたわ。

あの社長のお嬢さんがこっそり来てるって、橋本さんが教えてくれたもの。その人がわざわざ電話をリハーサル中にする？

華絵はどんどん知ってはいけないことを知ってしまったような気持ちになってきた。

佐藤順子は湯川に対して腹を立てていた。やっと、テレビに復帰

したのに、こう会えないのではやめたほうがいいって。あんまりよ、調子が出てきて評判もいいのに、冗談じゃないわ。有川聖子のあとは私しかないはずよ。それなのに、簡単にやめたらだなんて馬鹿にしてるわ。麗さんがこの頃、湯川社長に興味がないみたいで、相手にしてくれないからって何よ、でも、どうしてやきもちを妬かなくなったのかしら。

麗さんの気持ちが離れると、追いかけたくなるのが男の言い分なのね。だからって、私にやめろはないでしょう。麗さんに浮いた話も聞かないわ。相変わらず大崎さんには目を光らせているけど、あんな怖いお姉さんがいると、大崎さんも結婚はできないわね。噂をすれば、ほら、やってきた。

「あら、こんにちわ。順子さん、この頃とてもきれいよ。」

「ありがとうございます。やっとなれてきました。」

「聞きやすいし、お上手よ、やっぱり。」

珍しい、私をほめてくれるなんて。順子はびっくりするとともに、この人はいま、幸せなんだと感じた。私が離れていったから違うわ、恋しているのよ。きっと、相手は誰なんだろう。

湯川は麗が来て食事にも連れて行こうと思うほど、妻はきれいだった。変な話だが、この頃は妻がきれいと思い、夜もすぐ帰ってしまう。しかし、夜は麗が早く寝てしまって、なかなかこっちの誘いに乗ってくれない。かといって、佐藤順子も生き生きしていて、仕事は順調だが面白くない。女性はみんな強いのか、男なんていないのか、つまらないもんだ。

麗は健二の誕生日が近いとか言って、この間からメンズブティックの主人と電話でなんか注文していた。弟がそんなに可愛いのか、もういい年なのに、いつまで弟、弟って言ってるんだか。ほら、また、大崎の部屋に行ってしまった。

「健二さん、私よ」

ノックをしながらも、相手の返事を聞く前に部屋に入っていく。

麗は健二が忙しそうなきときは、邪魔をしまいようにおとなしくいつまでも待っていた。健二に対してはどこまでも従順だ。

「いらっしゃい、今日はどうしたんですか」

「いつものサロンの帰りよ。この間のお礼にベルトを買ってきたの。誕生日は別よ。」

「そんな、悪いよ」

「いいの、私の好きにさせて」

麗はにこにこしながら、健二の顔を見ながら答えた。健二はこの頃の麗の態度が、前よりもずっと、自分のほうを向いているように戸惑っていた。姉だから、おかしなことにはならないが、どうしたものかと。だが、今までで一番落ち着いた状態に見えるのは気のせいだろうか。

麗は楽しくてたまらなかった。この頃は健二もやさしく私と話をしてくれる。昔もそうだったのに、いつの間にか気持ちが離れて辛かった。しかも、あの聖子のおかげで、健二と二人が結婚するかもと聞いたとき、絶対にそうさせてはいけないと思ったのだ。健二は私の弟で、私の気持ちは健二のものだから。二人が結ばれるなんて許さない。私は昔から健二を好きだったから。健二しか見ていなかった。湯川は私でなくてもいいの、でも、私は健二しかない。だれにも渡さない。

第10章

第10章

会田は引き出しの中から1個の小さな箱を取り出した。この箱には、聖子に渡すつもりのもろちが入っていた。何かあるたびに聖子は相談に乗ってくれた。お札に渡すはずだったが、あの日、聖子は突然死んでしまった。合点がいかないのは、自分ばかりが調べられた気がする。

今日は華絵と昼の番組で一緒だった。華絵はあの事件以来採用されたが、視聴者からの評判がいい。ペアでやる相手としても、出しやばらず、一歩引いたところがあり、美人過ぎないところも人気が出るゆえんか。

佐々岡さんは何でこの人の才能がわかったんだろう。あの時に偶然再会しただけなのに。昔からよほど気にしていたのか。ふっと笑いながら、スタジオに向かった。

華絵は間を見つけると早速聞いてみた。

「会田さん、あの事件の日のリハーサルの時、大野社長は電話をもつて、その場を離れませんでした？」

「ああ、エリーゼが鳴ったよね、そういうば。忘れてたよ、すっかり。」

「やっぱり、でも、あの取り調べではみんなそのこと忘れてましたよね。」

「そうだねえ、まあすぐ帰ってきたし、大野社長は初めてで上がったから、もたもたしてねえ。」

「そして、聖子さんが出てくれたんですよねえ。」

「そうです、いつもいい時に出てくれるんですよ。」

「あの時、出てくることは分かっていましたか」

「いやあ、他の人は見学者の相手をするようになってたから、聖子

さんだけはいつもフリーなんですよ」

華絵は心臓が高鳴ってきた。

「じゃ、聖子さんが出てくることがわかって、誰かが毒を入れるとしたら・・・」

ぎょつとしたような顔で会田は、華絵を見つめた。そんなこと考えもしなかった。大野社長は朝から十分衛生状態もチェックしたが、電話が鳴ると出て行って、そのあとのチェックは誰がしたのか。いや、誰もしなかった。あの場から離れるなんて、あり得ないほどみんな注意しているから。でも、とっさの電話だから、社長だし、みんな気にも止めなかった。まさか、そんな、社長がするだろうか。自分の商品のデビューの日に。無理だ。

「華絵さん、確かに怪しいのは社長だけど、自分の会社がつぶれてしまうかもしれない賭けをするでしょうか。考えられないでしょう、そんなこと」

華絵もそれはそうだけど、と呟いたが、そうとしか考えられないのにと考えた。

麗は電話をかけていた。

「もしもし、私です。」

「うまくいきましたね、商品はヒット。これでお約束は果たしましたよ。」

大野は実はあの日にその場を離れたことを、しゃべってしまったことを打ち明けた。

「誰に？」

麗は途端にいらいらしてきた。何でそんなこと。

「華絵さんです。つい、でも一言だけですから。すぐ帰りましたし。」

しどろもどろになりながら、大野は汗をふきふき、麗に平身低頭に謝った。しかし、麗は怒って途中で電話を切ってしまった。大野はしかし、商人だった。麗はうちとの取引を止められないのだ。

麗は、リビングのソファに体を投げ出した。何か考えないと。

華絵は大野の娘に会うつもりだった。本当に電話をしたのかと。大野博美は父に出してもらったショップの社長をしていた。すつきりと髪をひきつめにして、小顔のきれいな娘だった。ショップは青山にあり、しゃれた舶来雑貨や、衣類、アクセサリーなどを置いていた。セレブショッピングの品物も置いていた。

華絵はそこまで来たからと、この店に寄ったという感じで博美に会った。

「あら、こんにちわ。このごろ、落ち着いてテレビも進めていらっやって、この店に来るお客さんにも華絵さんの評判いいですよ。」

「ありがとうございます。今日は一度見たかったので、このお店、会田さんに教えてもらいました。」

「そうですか、どうぞどうぞ、テレビでも紹介してください。」

「わかりました、このお店には大野社長は見えるんですか」

さりげなく来るかどうか確かめてみた。

「いいえ、全然。この店の利益なんて微々たるものですから、興味もないみたいです。」

華絵はほっとしながら、店を見まわした。青山に雰囲気がついたりのモノトーン仕立ての感じのよい店だった。アクセサリーを手にながら、少しずつ核心に迫っていった。

「あの日、目の前で亡くなったからびっくりしましたね。私は見学者だったんですけど」

「まだ、捕まらないんですね。私も行ってましたから、本当に驚きました。父がセレブショッピングにデビューするからうれしくて、スタジオに入らせてもらったの。」

「お父様は博美さんのことがかわいいから、着信音も、あなたが昔練習した曲っておっしゃっていましたよ」

「エリーゼのためにです。でも、あの曲はケータイを買った時からサービスで付いている曲だからだと思います。だって、ケータイは

電話とメールしかできないんだから。」

「そうなんですか。」

「ええ、店で教えてもらってそのままなのよ。だから、エリーゼなの。」

なんか微笑ましい感じがする。仲の良い親子なんだと思った。

「では、あの着信音が鳴ってもお嬢さんとは限らないんですか」

「そうよ、人には娘からのって言うけど、見栄ですよ。」

「あらあら、そうですか。そんなことばらしちゃっていいんですか。」

「そうね、秘密にしておいて、かわいそうだから」

華絵は帰り道、誰が電話をかけてきても、あの曲がなるのであれば、誰かに頼んでおけば、あの場所を離れることはできるのだ。じゃあ、葉はどこに。あの葉は確かメッキ工場で使うといったわ。修一がそういうことはくわしいから。今日のシヨップにも、自社の食器ばかりを飾るわけではないって言ってたけど、いろいろあったわ、金属製のもの。

「そうよ、体は消毒しても、ケータイはしないわ。できないもの。ケータイを調べることできるかしら。」

修一は後悔していた。妻は好奇心旺盛なのだ。昨日、殺人に使われた葉を思い出して、聞いてきたから、つい教えてしまった。インターネットで大野社長の会社がいろいろ金属製品の工場を持っていることがわかったが、恐ろしいことに巻き込まれそうで今日は娘さんに会うって言ってたが・・・。

恩田と佐伯はこの頃明るいという麗の噂を聞いていた。社長は相変わらずなのに、なぜ、麗がご機嫌なのか。麗の周辺も探っていたが社長の不倫も今はおさまっているせいなのか。

第11章

第11章

湯川は今日も順子にふられておもしろくなかった。

家に帰ると、大崎が来ていた。別に健二を嫌いというわけではないが、会社でも話しているのに、家でもというのは、男はいやだ。

「おい、どうしたんだ。会社でもいいじゃないか。」

「お帰りなさい。私が呼んだの。多いほうが楽しいじゃないの、夕食は。」

「すみません、もうお帰りかと思ってきたら、先になってしまっ
て。」

「いや、そんなことはないんだよ。仕事のことかと思って、いやいや食べて行ってくれたまえ。麗の食事なんて、久しぶりだよ。」

「そうよ、いつも私ひとりだったんだから。今日は健二さんの好きな和食。懐石風にしたわ。」

エプロン姿もこのところ見たことがなかったから、新鮮な驚きと、華やかな横顔がきれいだなと湯川は思っていた。順子もきれいだが、こんなエプロン姿は見たことがない。だが、こんな恰好をするのは健二のためなのか、弟っていつまでそんな・・・。

「麗、今日は、健二と酒でも飲むか。いいだろう」

大崎に向かって湯川は飲むしぐさをして見せた。大崎も笑って、姉と3人でというのは、初めてかもしれないね。」

「そうよ、外での会食やパーティーではあるけど、家でなんて初めてよ。健二さんたら来てくれないもの。」

「いやあ、そんなつもりはないけど、社長の家ですから、いけないですよ。」

「どうして？湯川は外でばっかりだから、来てほしいわ。いつも一人なんだもの、さびしいわ。」

と、湯川をにらんで見せたが、その様子は怒っているのではなく、健二に甘えているようだった。

湯川はぐいぐいと飲んで、ソファにごろんと横になった。いつもより早いピッチで飲んだからか、いびきをかき始めた。麗は寝ている湯川にブランケットをかけると、ワインを持ってきた。

「健二さん、こうやって来てくれると、私、うれしいわ。」

「今日はごちそうさま。本当においしかったよ。兄さんも喜んでたじゃないか。そうやってもっと作ってやれよ、今日はこんなにご機嫌で、姉さんのことほんとに惚れてるなってわかったよ。」

「湯川は順子さんが相手をしてくれないからよ。私のことなんてどうでもいいのよ。」

「そんなことないよ、絶対に」

「私は、健ちゃんさえいてくれればいいの。ほんとよ。」

麗は健二を見つめながら言った。健二はこういうムードになってはいけないと、ずっと思っていた。姉はきれいで、自慢の姉だったが、恋の相手には思えなかった。

「ねえ、今日は泊まって行って。」

「いや、帰るよ。仕事をしまいつけないと。」

「すぐ、逃げるのね、健ちゃん。そんなに私が嫌い？」

「違うよ、姉さんのこと嫌いなはずないじゃないか。姉弟なんだから」

「そういうんじゃないよ。」

麗が続けて言おうとしたら、健二は麗の唇に指をあてた。

「駄目だよ、そんなこと言ったら。それ以上言うと、来れなくなるよ。兄さんに悪いよ。それに僕は姉さんとしか見れないよ。」

「もう、聖子さんはいないわ。健ちゃん」

というと、健二の首に腕を回し、キスをしてきた。いけないという気持ちがあったのに、酔いが回っていた健二は、思わず抱きしめてしまい、舌を入れて応えてしまった。

聖子とのあの甘美な夜を思い出してしまったのだ。健二は、いつ

も聖子の部屋で、アロマの香の中で裸の腰を抱きしめていた。少し酔いが回ると、聖子は本当に魅力的で、華奢な胸を恥ずかしがっていても、その胸が好きだった。ブラジャーを外すのが、もどかしくて、ぐっと下から手を入れて乳房を握ると、少し吐息が聖子の口から洩れた。

そうになると、聖子は立っていらなくなり、ベッドへと誘ったものだ。いとしい聖子。

はっと気づいた健二は、あわてて麗から離れた。

「だめだ、ごめん」

と言うや否や、健二はあわてて帰って行った。そんな健二を追いかけようとする麗に、声がかかった。

「おまえたち、何をしているんだ。姉弟だろ？ 犬畜生じゃないか。」
麗は凍りついた。

佐々岡は華絵と話していた。

「佐々岡さん、あの事件だけど、私ね、大野社長がおかしいと思うの。」

「なんで。あの時、みんな身体検査されたんだぜ。」

華絵は自分の調べたことを佐々岡に告げた。佐々岡は驚きながら、華絵の話を真剣に聞いていた。

「その話を他の人にした？」

「ううん、こわいもの。まだ、確信を持っているわけじゃないし。」

「絶対に言うなよ。真実でなかったらえらいことだからな。」

「わかってる、言わないわ。」

「それにしても、君はすごいな。取材力にも長けていたものね。昔から。」

「いいえ、好奇心が強いだけよ。」

「まだ、調べるのかい？ 警察に任せたら」

「あとちょっとだけ。」

華絵は佐々岡には話してもいいと思っていた。佐々岡はときどき

相槌を打ちながら聞いていたが、

「こういうことは、犯人が捕まっていない以上、君も狙われるかもしれないから、気をつけないと」

「そうね、気をつけるわ。」

「今日は遅くなってもいいのかい？」

「ええ、夫が迎えに来てくれるの」

「仲がいいなあ。ご主人はこのこと知っているの？」

「まだ、話してないの。」

本当は話していたが、華絵はおしゃべりと思われたくないから、うそを言った。これぐらいの嘘は許されるだろう。

佐々岡はそれは良かったという顔をしてうなづいた。

華絵はこれから佐々岡と相談しあいながら、調査をしていこうと思った。恩田にはもう少しわかってからでないとはいけないと思っていた。それは、すべて憶測から出てきているからだ。証拠はない。それをつかまなければ。

恩田と佐伯は、麗に張り付こうかとしていた。長年の刑事の勘か、なんだか引つかかるのだ。今日も朝から湯川の家に向かった。湯川麗がアスレに通う時間だ。しかし、出てこない。湯川はずいぶん早く家を出たのか車がない。1時間、2時間過ぎて、ひとりの女性が来た。堀川樹里だ。

恩田は近づいて手帳を見せた。

「えっ、どうしたの。何かあったの。やっぱり」

「やっぱりとおっしゃると、何か心当たりがあるんですか」

堀川は、ジムで今度のアクセサリーの打ち合わせを軽くしましように、言ってたのに連絡がなく、すっぱかされたと思って電話もしたが、出ないから、直接会いにきたということだった。呼び鈴を押しても返事がない。

恩田は胸騒ぎがして、玄関を開けようとしたが、鍵がかかっている。裏へまわろうとしたとき、居間のガラス戸の隙間が見えた。そ

これから佐伯と二人で入ると、

「湯川さん、いらっしゃいますか、恩田です」

と、声を上げながら部屋を探したがいない、二階へ佐伯が上がっていくと、

「恩田さん、来てください」

と、大声がした。

あわてて恩田が二階へ駆け上がると、そこに見たのは、麗のあわれな姿だった。それは、なんとも言いようのない姿で、下着は膝まで下ろされ、髪は乱れ、ブラジャーから、半分乳房が出ていた。いかにもレイプされた姿で、しかも、首にはタオルが巻かれていた。死んでいたのだ。いったい誰が。湯川はどこだ、朝から車がない。彼がやったのか。堀川樹里は声も出ず、腰が抜けてしまったように座り込んでいた。

湯川は車を走らせていた。

何であんなことを、麗を愛していたのに。健二と二人でキスをしているのを見たとき、血が逆流したようだった。許さない、健二、お前もだ。

代々木のマンションで、健二はパソコンに向かって、そのまま寝てしまっていた。昨日はあんなことをしてしまって、本当にばかなことをしてしまった。

電話をかけようとしたが、言葉も見つからない。

大崎は湯川に見られたことは知らなかったのだ。

第12章

第12章

健二はやつと仕事を終えて、近所のコンビニに煙草を買いに行った。

健二と入れ違いに、湯川がマンション前に車をつけると、すぐにマンションの18階に上がっていった。ここのマンションは何回か訪問しているので、暗証番号も知っていた。

呼び鈴もノックも返事がない。留守なのか。怒りで体の震えが止まらない。麗と何をしているのだ。二人は姉弟なのだ。それなのに、昔から麗は健二のことを気にかけていた。それは、弟思いの姉としてと思っていた。しかし、違ったのだ。二人は愛し合っているのだ。おれの眼を盗んで。きつと、1回や2回のことではあるまい。くそ、許さん。俺が佐藤順子と会っていた時に、きつと、二人は睦みあっていたのだ。俺が知らないと思って、きつと、あの白い肌を、健二は好きにしていたに違いない。俺には拒んでいたときも、二人が密会した後だから嫌がったに違いない。

完全に妄想に入り込んでしまった湯川は、自分の社会的な地位など考えることができなくなっていた。ひたすら、どうやって殺してやろうかということしか頭になかった。

一方、健二は煙草を買うと、電話をかけようとケータイを手にした。麗が追ってきたのを振り切って帰ったことを、謝らないといけないと思っていた。麗は傷ついただろう。しかし、あんなこととしてはいけないのだと、健二ははつきりというつもりだった。だが、こんな朝早く電話をすると、湯川が、また不機嫌になるような気もした。迷っているうちに、ケータイが鳴った。

「もしもし、大崎さんですか」

「ああ、佐々岡君、朝早いね。」

「いま、社長の家で、麗さんが亡くなっているのが発見されました。」

「なんだって、・・・そんな・・・何で・・・」

思わずケータイを落としそうになった。パニックになってしまった。麗は殺されたようだという

「それが、社長の姿が見えなくて、車もありません。どこへ行ったか見当が付きません。行きそうなどころご存知ですか」

しまった。湯川は見たのだ。二人の姿を・・・。

「わからない。でも、僕の所へ来ると思うよ。」

健二は湯川がきつと、家に現れると思った。殺すほど愛していたのか。佐藤でなくてやはり妻を。麗は、麗は、・・・麗と過ごした子供のころが走馬灯のように浮かび、健二は涙がこぼれてきた。俺の周りの女は、みんな死んでしまう。俺を残して。

「兄さん、早く来てくれ。」

健二は早く湯川に処刑されたかった。

恩田は佐伯と有川聖子に続いて、湯川麗が死んだことにショックを受けていた。やっと、めどがついたのに、なぜ、麗が殺されるんだ。事件はどうつながっていたんだ。

恩田は、麗のあの事件の日の直前の電話記録から、大野との通話記録を見つけた。大野の会社がメッキを扱うことから、あの薬品も手に入るということがわかった。麗の体内からは湯川の体液が見つかったと、佐伯が報告してきた。

麗を殺したのは湯川。有川聖子をやったのは麗から頼まれた大野。だが、麗の動機がわからん。湯川の動機も。二人の間に何があったのか。死人に口なし、麗の言葉は聞けない。しかし、湯川を見つければ、少なくとも、湯川の話聞ける。探すんだ。どこへ行った。

華絵はそのころ、佐々岡の話聞き、愕然としていた。麗さんが殺されたですって。予想もしない展開に、打ちのめされてしまった。

佐々岡は社内の殺人事件が2件になってしまったことに危機感を抱いた。

「このセレブショッピングはつぶれてしまう。」

「えっ、どうしてですか」

「いくら店頭販売ではないといっても、あまりに悪いイメージができてしまった。」

佐々岡は、早く子会社を作ることを相談したかった、大崎健二とセレブショッピングは、優良企業として、毎年名をあげてきたのだ。この百年に一度の不景気にも、右肩上がりで成績を上げてきたのだ。今、つぶしては何にもならない。大崎と二人で手をうたないと。

華絵は佐々岡の気持ちもわかったが、二人の死者よりも会社のことを考える佐々岡に、今までのあこがれに近い気持ちに水を差されたような気になった。もちろん、会社はたくさんさんの社員もあり、生活を守るというのはわかる。だが、死を無視していいのか。

華絵も、大崎に会いたかった。恋人を失い、姉を失い、どれほど心に傷を負ったことか。そして、なぜ、社長は奥さまを手にかけてのか。華絵は頭が混乱しながらも、あの麗が来たときに使う、控室を見ておかないと、と考えていた。あれほどみんなが調べられたのに、見つからなかった薬品。ひよつとすると、残りはあの控室のロッカーにあるのではと、思っていた。警察がみんなの持ち物も調べた。あの日はわからなかったが、戸田悦子が、今朝言っていた。

「あの日、麗さんのロッカーはわからなかったのよ。」

「あそこにはありませんよ、麗さんのロッカー。」

「あるの、本当は。私たちのロッカーの後ろのカーテンにドアがあるの。」

「えっ、秘密の部屋ですか。」

戸田悦子は、少し得意そうに、こういった。

「あのドアを開けると、隠し金庫なの。この会社の重要書類が入ってるらしいの。つまり、マルサから逃れるため。知っているのは佐々岡さんと社長と麗さんと大崎さん」

「どうして戸田さんがご存知なの」

「実は、この前、私失敗してしまったでしょ、あの時に、控室に泣いて走って帰ったの。ノックもしないで開けたら、麗さんがいて、あの金庫の戸が開いてたの。でも、麗さんは、金庫とはいわずに、私の個人的ロッカーだからって言ったけど、みんなには秘密ねと言われて。その時ここは4人しか知らないから、あなたも今回のことがあったから秘密は守らないと、会社にはおれなくなるかもって。いやあね、要するに脅されたの。」

「そうなんですか。でも、鍵は誰が持ってるんですか」

「それは、あの4人か、どこかに隠してるか。」

しかし、誰でも開けてはいけないのだから、私たちの目に届かないところ。やはり社長室しかない。華絵は、社長が見つからない今しか、探せないと思った。チャンスは今この時しかない。

控室には誰もいなかった。あわてて鍵をかけて更衣中のふりをした。カーテンを開けると、やはり壁しかないみたいだ。しかし、コンセントをさわると右へ動かすことができた。そこには電子錠。華絵は元に戻して、社長室へと向かった。

今日は誰もいないはずだ。受付や駐車場、守衛室には警察がいる。しかし、上にはいない。佐々岡もスタジオにいた。

華絵はあたりを見回しながら、社長室の戸を開けた。ゴージャスな部屋にシックな家具。広くて却って見つかりそうで怖い。机の引き出しを開ける。そんな鍵のようなものは見つからない。もぐりこんで、引出しの底を眺めていると、音が聞こえた。

誰が入ってくる。広い机の中に体を入れ、息をひそめた。

「もしもし、佐々岡です。僕のケータイも今はキャッチされているので、使えません。社長、どこにいるんですか」

華絵は心臓が止まりそうだった。こんな場所に、隠れていることがばれたら、どうやって申し開きをすればいいのだ、できはしない。「わかりました。大崎さんが来たら、必ず教えます。でも、この会

社をつぶすわけにはいきません。」

「・・・しかし、このことが世間に広まるのも、もう時間の問題です」

「・・・今のところ、怪しんでいるのは木村華絵だけです。始末します、僕が連れてきたんですから」

ということ、華絵は声が出そうになった。

最終章

最終章

湯川は佐々岡に1ギリでケータイに連絡した。佐々岡は社長室からかけなおしてきた。しかし、何でこんなことになったのか、俺の人生は、殺人で終わりか。全く予想外だ。佐藤順子と仲良くなっても、麗は嫉妬に狂うということはなかった。俺だってそうなるってほしいとは思わなかったが、こっちが逆上するとは。

佐々岡は会社のことを心配していた。俺の心配ではないさ、それはそうだ。自虐的に湯川は笑った。佐々岡は頭の切れる男だ。どうにかしてくれるだろう。だが、華絵が何かつかんでいるようなことを言っていた。何のことだ。俺の事件以外で掴んできると言えば、聖子の事件か。それは、誰なのか。社内なのか。佐々岡は何を知っているんだ。くそ、みんな俺のそばにいないが、俺をのけ者にしてきたのか。とにかく大崎だけは生かしておけん。

ガチャ、大崎だ。

湯川は身を潜めた。しかし、

「社長、いや、兄さん。俺だ。逃げも隠れもしないよ。」

健二は落ち着いていた。湯川は、隠れていたクローゼットから出てきた。手にはこの部屋にあった包丁を握って。手には手袋をして。

「兄さん、誤解だよ。姉さんとは何にもないよ。」

「うそつけ、俺は見たんだぞ。馬鹿にするな」

「違うよ、確かに酔ってたから、キスをしたよ。だが、僕が愛していたのは聖子だ。姉じゃない。」

「なんだと、聖子だと。うそつけ」

「そうだよ、聖子が死んでから、投げやりになっていた僕を、麗は慰めてくれただけだ。」

「そんなキスじゃない、麗はお前のことを、ずっと愛していたんだ、俺をないがしろにして」

「姉さんは、昔からないものねだりをする人だよ、人のおもちゃがほしただけなんだ。」

「どういことだ」

「僕が聖子と愛し合っているのがわかって、自分のほうへ気持ちを向けたかったんだ。・・・そうか・・・そうだったんだ」

健二は聖子がだれに殺されたのか、今、やっとわかった。麗・・・姉さんだったのか。

「麗がやったのか、聖子を。まさか、人を殺せる奴じゃない。」

湯川は自分に対してそれほど気持ちを見せなかったのに、健二には、と思うと余計に許せなかった。

「麗は、あの日、お前が帰った後、お前のことを昔からずっと、愛していたとぬかしやがった。結婚相手の俺よりも、ずっとずっと愛していたと。」

「違うよ、麗は身内としての気持ちが強かっただけさ、勘違いなんだ。いちばん近い異性だったし。僕が避けてきたのは、姉の気持ちに偏っていることが分かっていたから。母に対してつらく当たる、その仕返しの気持ちも、僕にはあったさ。でも、聖子が死んでさびしかった僕は、姉について甘えてしまったんだ。今まで甘えなかったから、姉はきつとうれしくて、愛情と勘違いしたのさ。兄さんのことは愛していたんだ。」

「何をいまさら。」

「そうなんだ、兄さんが佐藤順子と一緒にいるときは、あれほどサロンに通ったのはなんでだと思うの、見てほしかったからだよ。会社に良かれと思って、いろいろと交友関係を広げたのも、全部兄さんのためじゃないか。」

「違う違う、そんなこと言ったって、信じないぞ。お前を殺す」

「・・・いいよ、僕は聖子のいない人生が、こんなにつまらないとは思っていなかった。・・・もういいさ」

健二はソファに力なく座った。

湯川は手に包丁を握ったまま、少しずつ近づいてきた。逃げようとするしない健二に、ますます腹を立てて。

「湯川、やめろ。」

恩田刑事が、どこかと警察官をひきつれて入ってきた。湯川の手をねじり上げた。包丁はなかなか離れなかった。しかし、3人がかりでついに落とした。

「湯川麗の殺人容疑で逮捕する」

健二は恩田に向かって

「何でここへ来るんだ、兄は悪くない。僕がいけないんだ。麗にも・
・聖子のところへ行きたかったのに」

警察で詳しく話をしたいと、大崎は湯川の弁護と一緒に車に乗り込んだ。

佐々岡は会社のことしか考えていなかった。警察が入り込んできたら、このセレブショッピングは消えてしまう。華絵を消せば、これ以上この会社の株価を下げることはない。麗が大野社長に薬を入れさせたとしても、社長が俺になれば、まだ、どうにか立ちなおせる。大崎は湯川に殺される。俺しかないんだ。華絵を殺せば、この事件は闇の中だ。

ルルルルル・・・

しまった、ケータイのバイブが。

佐々岡は、机の下をのぞくと、あわれな華絵の縮みあがった姿があった。佐々岡に引きずり出された。

「聞いてたな」

「あなたがそんな人だったなんて」

「俺は、会社が大事なだけさ。誰も殺してはいない。悪人なんかじゃない。」

「十分悪よ。私を殺すですって。・・・ひどい」

「仕方ないんだ。この会社は今絶好調なんだ。こんなこと不景気な

時代にあり得ないほどさ。」

「だからって、何で、私を」

「君が高校の時のように好奇心旺盛になったからだよ。僕がスタジオで君を見たとき、君の才能を思い出したのも事実さ。あの時は素直に喜んださ。だが、君はどんどん昔のように、目がきらきらして好奇心旺盛な学生に戻ってしまった。知らなくていいことを、知りすぎたのさ。」

「やめて、来ないで。」

後ずさりしながらも、怖さで足がすくんでしまう。観葉植物にあたり、転んでしまった。佐々岡はその時華絵の手をつかもうとした。その右手を羽交い絞めにされた。

「佐々岡、傷害容疑で逮捕する」

佐伯が飛び込んできてくれた。華絵は気を失ってしまった。

「大丈夫か」

修一が、華絵の顔を覗き込んでいた。

恩田が大野社長のケータイに毒物が付着していて、その薬品も金庫に隠されていた。と華絵に話してくれた。悲しいかな、聖子も麗も、愛憎の狭間で殺されてしまった。

セレブショッピングは、続いていた。

画面の向こうでは、佐藤順子が笑っていた。キャスターとして、そして、堀川樹里との共同経営者として。

華絵は修一と見ていた。修一は華絵の顔を見ながら、

「やっぱり、やめてもったいないと思ってるんじゃないか？」

「ううん、私は電話をかけるほうが似合ってるの。テレビ通販は画面のこちらで見なきゃ。」

と笑って答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4863h/>

テレビ通販殺人事件

2010年10月8日15時02分発行